〈研究論文〉

日常生活行動における高齢者の要望や困りごとへの対応に関する施設職員の意識の構成要素

木村勇介*1・深谷安子*1

Conscious Factors of Long-Term Care Facility Staff Toward Demands and Problems of the Elderly Regarding Their Daily Life Activities

Yusuke KIMURA*1 and Yasuko FUKAYA*1

〈抄録〉

先行研究において、介護保険施設に入所する高齢者が日常生活行動場面の中で感じている34項目の要望や困りごとが明らかにされた。本研究は、この34項目の要望や困りごとについて、施設職員が対応したいと指向する要素の探索を目的とした。

34項目の要望や困りごとへの対応に関する意識についての自記式調査票を作成した後、A県内の6ヵ所の介護保険施設において、計92名の看護・介護職員を対象に質問紙調査を実施した。なお、得られた回答に対しては数量化理論III類を用いて分析した。

固有値が上位の3軸（0.30、0.10、0.09）にて検討した結果、高齢者の要望や困りごとについて施設職員が対応したいと指向する要素としては、〈自分たちの援助の行い方に関する要望や困りごと〉、〈対応には多職種の協力が必要な要望や困りごと〉、〈施設ケアの現状では対応が特に困難な要望や困りごと〉の3要素を明らかにし、これらの累積寄与率は48.8%であった。

Key words：介護保険施設、施設職員、要望や困りごと、意識の構成要素

Ⅰ．はじめに

先行研究（木村・深谷、2008）において、介護保険施設に入所中の高齢者が日常生活行動場面において感じている具体的な要望や困りごとと、これを構成する要素とを明らかにすることを目的に聞き取り調査と質問紙調査とを実施した。

その結果、介護保険施設に入所する高齢者が日常生活行動場面の中で感じている具体的な要望や困りごととしては、表1に示すような34項目の要望や困りごとを明らかにした。また、これらの要望や困りごとを構成する要素としては、〈食生活への要望や困りごと〉、〈快適な生活ペースや居住空間への要望や困りごと〉、〈プライバシーや尊厳を配慮した援助への要望や困りごと〉といった3つの要素を明らかにした。

先行研究により明らかにした施設入所高齢者が日常生活行動場面の中で感じている34項目の要望や困りごとについて、現場の中で日々高齢者へのケアを実践している看護職員や介護職員が今後どのような部分を対応していきたいと考えるのか、その指向性を調査することは職員の施設ケアへの意識を理解する上で、重要な資料となることが予測される。そこで、本研究では、この34項目の要望や困りごとについて、介護保険施設の看護・介護職員が対応したいと指向する要素を探索することを目的とした。

Ⅱ．用語の定義

(1) 日常生活行動

本研究では、総務庁統計局が行っている社会生活基本調査報告（総務省統計局、2009）の生活の捉え方を参考

＊1　東海大学健康科学部看護学科

表１．高齢者が日常生活行動場面において感じている34項目の要望や困り事

＜睡眠に関するもの（３項目）＞	
A-1	同室者の声や振舞いで眠れない
A-2	部屋や廊下の光が気になって眠れない
A-3	他の利用者のオムツ交換の音で目が覚める
＜洗顔に関するもの（１項目）＞	
B-1	お湯を使って顔を洗いたい
＜入浴に関するもの（７項目）＞	
C-1	入浴の回数をもっと増やしてほしい
C-2	もっとゆっくり入浴したい
C-3	入浴する日や時間帯を自分で決めたい
C-4	介助者や他の利用者とではなく一人で入浴したい
C-5	入浴の時に裸で待たされることがあり恥ずかしい
C-6	入浴の時に異性の職員に介助をされることがあり恥ずかしい
C-7	髪の毛を洗う回数をもっと増やしてほしい
＜排泄に関するもの（５項目）＞	
D-1	排尿や排便をトイレでしたい
D-2	排尿や排便の時に呼んでも職員がすぐに来てくれない
D-3	オムツのあて方が悪く、尿が漏れてしまう
D-4	トイレに近い部屋にしてほしい
D-5	むやみに浣腸を使用されるため嫌である
＜着替えに関するもの（４項目）＞	
E-1	洋服や下着など好みの衣類をもっと着たい
E-2	オムツをつけているが、普通の下着を穿きたい
E-3	もっと頻繁に着替えたい
E-4	パジャマではなく洋服を着たい
＜化粧に関するもの（１項目）＞	
F-1	必要な化粧用具が手に入らない
＜整髪に関するもの（１項目）＞	
G-1	ブラシなどの整髪用具が手に入らない
＜散発に関するもの（３項目）＞	
H-1	散髪の時に髪を洗ったり、髭を剃ってもらいたい
H-2	パーマや毛染めなど希望の髪形ができない
H-3	もっと頻繁に散髪をしてほしい
＜食事に関するもの（９項目）＞	
I-1	食事の味付けが口に合わない
I-2	食事の固さや刻み方が好みに合わない
I-3	食事の量が合わない
I-4	食事の時に食べたい物が出ない
I-5	朝食の時間を早くしたり、夕食の時間を遅くしてほしい
I-6	食事の時の席を一方的に決めないでほしい
I-7	常時、調味料をテーブルにセットしてほしい
I-8	食事の時にコーヒーや紅茶を出してほしい
I-9	食堂で食事を待たされる時間が長い

に日常生活行動を定義した。社会生活基本調査報告では、生活を活動の側面から分類しており生理的に必要な活動を１次的活動、社会生活を行う上で義務的な性格の強い活動を2次的活動、これら以外の各人が自由に使える時間における活動を３次的活動と呼んでいる。本件究では、これらのうち１次的活動に含まれる行動を参考に睡眠、洗顔、入浴、排泄、着替え、化粧、整髪、髭剃り、散髪、食事の計10行動を日常生活行動と定義した。

Ⅲ．方　法

１．調査対象

Ａ県内にある介護療養型医療施設、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、それぞれ２施設ごとの計6施設における看護職員と介護職員とを対象とした。なお、自らの施設でのケアの現状に対してより理解していることが予測されるため、調査施設での経験年数が１年以上の施設職員を調査対象者とした。

２．調査方法

(1) 調査表の内容

先行研究によって明らかにした施設入所高齢者の日常生活行動場面における34項目の要望や困りごとに対して、「それぞれの要望や困りごとを今後どの程度対応したいと思うか」について、「全く思わない」、「あまり思わない」、「やや思う」、「非常に思う」といった４段階の順序尺度による選択肢からなる自記式質問紙を作成した。

また、調査表の中では、属性として調査対象者の年齢、性別、職種、調査施設での経験年数を調査する欄も設けた。

(2) 調査方法

先に述べた６ヵ所の介護保険施設において、それぞれの施設の管理者へ口頭にて研究の主旨を説明し、同意が得られた後、施設職員の紹介を依頼した。

６施設より紹介を受けた、計94名の施設職員に対して質問紙調査を実施した。なお、調査対象者への調査表の配布は調査対象者個人宛に郵送し、回答の回収は研究者個人宛に郵送してもらい行った。

その結果、92名（回収率：97.9%）より回答が得られ、これらのすべてを分析対象（有効回答率：100%）とした。

３．分析方法

得られた回答に関して以下の手順によって統計学的分析を行った。なお、分析には統計学パッケージSPSS

ver.11.5（シリアル番号：6266581）を使用した。また、以下の手順に用いる数量化理論III類はGUI版数量化理論プログラム　ver.2.2（シリアル番号：6145190）をSPSS ver.11.5にインストールした上で使用した。

(1) 施設職員の基本属性に関する単純集計を行った。
(2) 34項目の要望や困り事への施設職員の回答に関して、数量化理論III類を適用した際に要素の集約がより可能となるように、4段階の順序尺度による回答を2分類し、「非常に思う」及び「やや思う」と回答した者を「思う」、また「あまり思わない」及び「全く思わない」と回答した者を「思わない」と置き換えた。
(3) 施設職員の回答に関して、それぞれの項目別に「思う」と回答した人数の中央値を算出した。そして、「思う」と回答した人数が中央値の46人（50.0%）を超える上位15項目を、多くの施設職員が対応したいと考える要望や困り事と捉えた。
(4) 多くの施設職員が対応したいと考える15項目の要望や困り事に対して数量化理論III類を適用した多変量解析を行った。数量化理論III類を適用する際、2分類に分けた「思う」の回答を1つのカテゴリーに、また「思わない」の回答を別のカテゴリーとして分析に投入した。

4．倫理的配慮

本研究は、東海大学健康科学部倫理委員会の承認を受けた上で実施した。まず、調査施設の管理者には、研究計画書を用いて口頭にて主旨を説明し、文書にて同意を得た。また、施設管理者より紹介を受けた職員に対しては、調査表と、研究の目的、意義、個人情報の保護などを記載した同意説明文書とを郵送配布した。そして、郵送にて調査表と同意書とを回収できた施設職員を研究対象者とした。

IV．結　果

1．調査対象者の概要

調査対象である施設職員の属性を単純集計した結果を表2に示す。

調査対象者の概要としては、看護職が26名（28.3%）、介護職が65名（70.7%）、無回答が1名（1.1%）であり、また、男性が30名（32.6%）、女性が61名（66.3%）、無回答が1名（1.1%）であった。年齢は、22歳から68歳までの平均38.2（±11.3）歳であり、調査施設での臨床経験年数は、1年から30年までの平均6.3（±6.1）年であった。

表2．調査対象者の概要

（n＝92）

		人数(人)	割合(%)
性別	男性	30	32.6
	女性	61	66.3
	不明	1	1.1
職種	看護職	26	28.2
	介護職	65	70.7
	不明	1	1.1
年齢	～29歳	25	27.2
	30～39歳	30	32.6
	40～49歳	14	15.2
	50歳～	21	22.8
	不明	2	2.2
調査施設における経験年数	1～3年	41	44.5
	4～6年	19	20.6
	7～9年	14	15.2
	10年～	16	17.4
	不明	2	2.2

2．高齢者の要望や困りごとについて施設職員が対応したいと指向する要素

表3は、多くの職員が対応したいと考えている15項目の要望や困りごとに関して数量化理論III類を適用した分析結果であり、固有値の大きさが上位3つの成分軸に対応するそれぞれのカテゴリーのスコアを示したものである。3つの成分軸の固有値は順に、0.30、0.10、0.09であり、これらの累積寄与率は48.8%であった。

第Ⅰ成分軸は、15項目の困り事や要望のそれぞれに関して「思う」のカテゴリーが正のスコアを示し、また「思わない」のカテゴリーが負のスコアを示していることから、それぞれの要望や困りごとに関して対応したいと考えるか否かを表す成分軸であると考えられた。

そこで、第Ⅰ成分軸で正のスコアを示している15カテゴリーを、そのカテゴリースコアから第II成分軸と第III成分軸とをクロスした空間に配置したものが図1であり、カテゴリー間の距離が近接するものをまとめて要素の抽出を試みた。

その結果、施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとへの要素として以下の3つの要素が抽出された。

(1) 第1要素：【排尿や排便をトイレでしたい（D-1)】、【排尿や排便のときに呼んでも職員がすぐに来てくれない（D-2)】、【入浴のときに裸で待たされることがあり恥ずかしい（C-5)】、【他の利用者のオムツ交換の音で目が覚める（A-3)】、【食堂で食事を

表３．15項目の要望や困りごとのカテゴリースコア

要望や困り事		カテゴリー	n	第Ⅰ成分軸	第Ⅱ成分軸	第Ⅲ成分軸
A-1	同室者の声や振舞いで眠れない	思わない	22	−2.05	−0.23	3.12
		思う	70	0.64	0.71	−0.98
I-4	食事のときに食べたい物が出ない	思わない	24	−1.76	1.37	1.86
		思う	68	0.62	−0.48	−0.65
I-3	食事の量が合わない	思わない	27	−0.50	1.50	−0.88
		思う	65	0.63	−1.87	1.10
I-1	食事の味付けが口に合わない	思わない	28	−1.48	2.22	−1.77
		思う	64	0.65	−0.97	0.77
H-1	散髪のときに髪を洗ったり、顔を剃ってもらいたい	思わない	29	−1.12	2.46	−1.72
		思う	63	0.52	−1.13	0.79
H-2	パーマや毛染めなど希望の髪形ができない	思わない	31	−1.50	0.38	1.73
		思う	61	0.76	−0.19	−0.88
C-6	入浴のときに異性の職員に介助されることがあり恥ずかしい	思わない	31	−1.15	−0.22	−0.05
		思う	61	1.31	0.25	0.06
D-4	トイレに近い部屋にしてほしい	思わない	33	−1.46	0.44	1.83
		思う	59	0.81	−0.25	−1.02
I-9	食堂で食事を待たされる時間が長い	思わない	34	−1.58	−0.43	−0.24
		思う	58	0.92	0.25	0.14
I-2	食事の固さや刻み方が好みに合わない	思わない	34	−1.38	0.04	−0.95
		思う	58	0.81	−0.02	0.55
C-5	入浴のときに裸で待たされることがあり恥ずかしい	思わない	38	−1.17	−1.46	−0.71
		思う	54	0.83	1.03	0.50
D-2	排尿や排便のときに呼んでも職員がすぐに来てくれない	思わない	43	−1.12	−1.08	−1.07
		思う	49	0.98	0.95	0.94
A-3	他の利用者のオムツ交換の音で目が覚める	思わない	44	−0.75	−1.55	−0.52
		思う	48	0.69	1.42	0.48
C-2	もっとゆっくり入浴したい	思わない	45	−1.20	−0.30	0.28
		思う	47	1.16	0.29	−0.27
D-1	排尿や排便をトイレでしたい	思わない	46	−0.56	−1.18	−1.19
		思う	46	0.56	1.18	1.19
		固有値		0.30	0.10	0.09
		相関係数		0.55	0.32	0.30

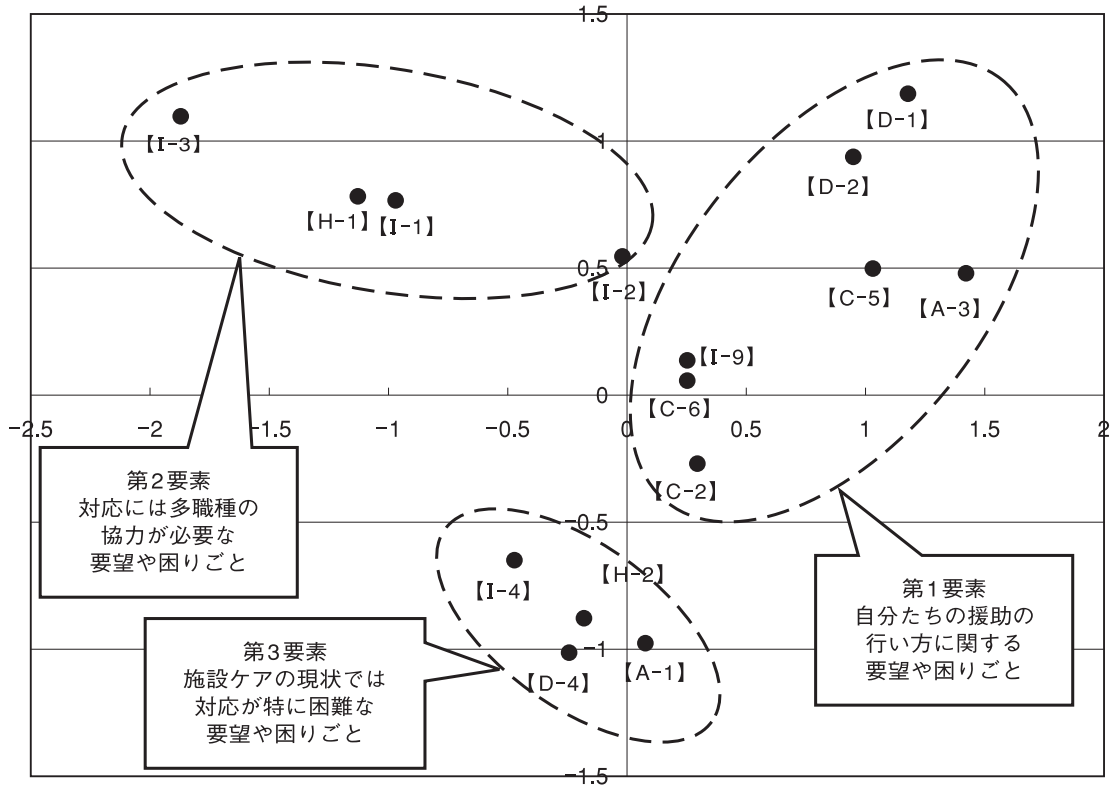

図１．施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとの要素　※横軸：第Ⅱ成分軸　縦軸：第Ⅲ成分軸

待たされる時間が長い（I-9)】、【入浴のときに異性の職員に介助されることがあり恥ずかしい（C-6)】、【もっとゆっくり入浴したい（C-2)】の７カテゴリーが近接し、これらを〈自分たちの援助の行い方に関する要望や困りごと〉として抽出した。

(2) 第２要素：【食事の量が合わない（I-3)】、【散髪のときに髪を洗ったり、顔を剃ってもらいたい（H-1)】、【食事の味付けが口に合わない（I-1)】、【食事の固さや刻み方が好みに合わない（I-2)】の４カテゴリーが近接し、これらを〈対応には多職種の協力が必要な要望や困りごと〉として抽出した。

(3) 第３要素：【トイレに近い部屋にしてほしい（D-4)】、【同室者の声や振舞いで眠れない（A-1)】、【パーマや毛染めなど希望の髪型ができない（H-2)】、【食事のときに食べたい物が出ない（I-4)】の４カテゴリーが近接し、これらを〈施設ケアの現状では対応が特に困難な要望や困りごと〉として抽出した。

Ⅴ．考　察

本研究では、施設入所高齢者が日常生活行動場面の中で感じている34項目の要望や困りごとについて、施設職員が対応したいと指向する要素を探索することを目的に質問紙調査を実施した。得られた回答をもとに数量化理論Ⅲ類を用いて分析した結果、施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとの要素として３つの要素が抽出された。この３要素の性質から検討すると、施設職員は自分たちの力でどこまで対応できるかという潜在的な意識によって、高齢者の要望や困りごとを捉えていることが推測された。

施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとを構成する第１要素として、〈自分たちの援助の行い方に関する要望や困りごと〉が抽出された。この要素には、日々の日常生活行動場面において、高齢者と施設職員との関わりの中から派生する要望や困りごとを示す項目が含まれていた。これは、自分達が日々担っている身近な日常生活支援の行い方の見直しを図ることによって対応したいとする看護職員や介護職員の意識であることが示唆された。

施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとの第２要素として、〈対応には多職種の協力が必要な要望や困りごと〉が抽出された。この要素は、施設ケアにおいて看護職員や介護職員のみでは対応することが難しいと考えられる要望や困りごとを示す項目で構成されていた。【食事の味付けが口に合わない（I-1)】、【食事の固さや刻み方が好みに合わない（I-2)】、【食事の量が合わない（I-3)】といった項目への対応は、管理栄養士や厨房スタッフとの連携や調整を必要とするものである。また、同様に【散髪のときに髪を洗ったり、顔を剃ってもらいたい（H-1)】といった項目への対応もそれぞれの施設へ訪問営業する理容師や美容師などとの連携や調整を必要とするものであると考えられる。したがって、これは、自分たちの力のみでは対応が困難であるが、多職種との連携や調整を行うことによって要望や困りごとの実現や改善を図りたいとする看護職員や介護職員の意識であることが示唆された。

施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとの第３要素として、〈施設ケアの現状では対応が特に困難な要望や困りごと〉が抽出された。この要素には、上述してきたような看護職員や介護職員が担う日々の生活支援の行い方の見直しによって、あるいは多職種との連携や調整によってでは対応が非常に困難な要望や困りごとを示す項目が含まれていた。【同室者の声や振舞いで眠れない（A-1)】や【トイレに近い部屋にしてほしい（D-4)】といった項目は、トイレの増設、居室の個室化などの施設構造の改築を必要とするものである。また、【パーマや毛染めなど希望の髪形ができない（H-2)】は、一般的に介護保険施設施設で行われているような１ヶ月、あるいは２ヶ月に１度の限られた時間内での理容師や美容師による訪問営業では対応が困難なものである。さらに、【食事のときに食べたい物が出ない（I-4)】といった項目に関しても、個々の高齢者が食べたい物をそれぞれに合わせて毎日提供していくことは非常に困難なことであると思われる。したがって、これらは対応の必要性を感じているものの、その実現のためには諸々の根本的な制度的側面や経済的側面までも含めて改善しなければならないような非常に困難な要望や困りごとであるという施設職員の意識であることが伺われた。

先行研究（木村・深谷、2008）において、筆者らは、施設入所高齢者の日常生活場面における要望や困りごとを構成する３つの要素として〈食生活への要望や困りごと〉、〈快適な生活ペースや居住空間への要望や困りごと〉、〈プライバシーや尊厳を配慮した援助への要望や困りごと〉を明らかにした。しかしながら、このような施設入所高齢者の意識と、本研究で明らかにした施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとの３つの構成要素である〈自分たちの援助の行い方に関する要望や困りごと〉、〈対応には多職種の協力が必要な要望や困りごと〉、〈施設ケアの現状では対応が特に困難な要望や困り

ごと〉といった職員による対応の意識との間には共通性が乏しいことが示唆された。

本研究で用いた要望や困りごとと類似する意味をもつニーズという概念では、これまでの文献を概観すると、病院に入院中の患者が感じているニーズに関して、看護師と患者との間の認識に差異があることが報告されている（Farrell, 1991: Löfmark et al, 1999: Walters et al, 2000）。また、岡本・岡田（2002）は、特別養護老人ホームに入所する高齢者が感じているニーズに関して、施設職員と高齢者との間に認識の差異があるということを述べており、永野（2009）は、身体障害者療護施設利用者が感じているニーズに関して、施設職員と利用者との間にも認識の差異があるということを報告している。これらの研究では、主にケアの受け手が感じているニーズについて、ケアの受け手の認識とケア提供者との認識の一致度が調査されており、これらに共通して述べられていることは、入院患者や施設利用者といったケアの受け手が感じているニーズを、その本人たちよりも看護師や施設職員といったケアの提供者の方が過大に認識しているということである。

本研究は、高齢者の要望や困りごとへの施設職員の「対応の意識」を明らかにしようと試みたものであり、これらの先行研究のようにケアの受け手が感じているニーズについてのケア提供者の認識を明らかにしているものではない。本研究によって明らかとなった施設職員が対応したいと指向する要望や困りごとの3つの要素によって、施設入所高齢者の要望や困りごとを過大に認識しているというよりも、むしろ施設職員は全く異なった視点で要望や困りごとへの対応を捉えていることが推測された。つまり、施設職員は、「対応の意識」という側面から検討したとき、限られた資源、マンパワー、能力の中で自分たちがどこまで対応できるのかといったより現実的な視点によって施設入所高齢者の要望や困りごとを捉えていることが示唆された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、施設入所高齢者の34項目の要望や困りごとについて、施設職員が対応したいと指向する要素を探索することを目的とした質問紙調査を実施した。しかしながら、調査施設や調査対象者に限りがあり、研究結果を一般化することは難しい。また、数量化理論III類を適用した分析結果の累積寄与率も48.8%と決して高い値が得られたとはいえず、さらに潜在的な要素を探索する必要がある。そのため、今後はより多くの施設と施設職員を対象とした調査を継続して進める必要性があると考える。

謝　辞

本研究において、快くフィールドを提供して下さったそれぞれの介護保険施設の管理者の方々と、お忙しい中調査へのご協力をしていただいた施設職員の皆様に深く感謝申し上げます。

文　献

Farrell GA (1991): How Accurately Do Nurses Perceive Patients' Needs?; A Comparison of General and Psychiatric Settings. Journal of Advanced Nursing, 16, 1062-1070.

木村勇介，深谷安子（2008）：施設入所高齢者の日常生活行動に関する要望や困りごとの構成要素、日本老年看護学会誌、13(1)，49-56.

Löfmark A, Hannersjö S, et al (1999): A Summative Evaluation of Clinical Competence; Students' and Nurses' Perceptions of Inpatients' Individual Physical and Emotional Needs. Journal of Advanced Nursing, 29, 942-949.

永野典詞（2009）：身体障害者療護施設利用者と施設職員の主観的ニーズ認識に関する研究　主観的ニーズに関するアンケート調査の分析から、社会福祉学研究、49（4）、92-103.

岡本秀明，岡田進一（2002）：施設入所高齢者と施設職員との間の主観的ニーズに関する認識の違い、日本公衆衛生雑誌、49、911-920.

総務省統計局（2009）：平成18年社会生活基本調査.

Walters K, Iliffe S, et al (2000): Assessing Needs from Patient, Carer and Professional Perspectives; The Camberwell Assessment of Need for Elderly People in Primary Care. Age Ageing, 29, 505-510.

Conscious Factors of Long-Term Care Facility Staff Toward Demands and Problems of the Elderly Regarding Their Daily Life Activities.

Abstract

A previous study identified 34 demands and problems of elderly patients in long-term care facilities regarding their daily life activities. This study attempted to determine the factors affecting care facility staff when addressing these 34 demands and problems.

We recruited 92 nurses and care-givers who worked in 6 long-term care facilities in a prefecture in Japan and asked them to fill out a self-written questionnaire on their attitudes toward the 34 identified demands and problems. The survey results were analyzed based on Quantification method of the third type.

Upon review of the three major axes with significant values (0.30, 0.10, and 0.09), the major factors regarding demands and problems of elderly patients were determined to be "matters related to the method of support", "matters requiring cooperation with individuals from various professions" and "matters which are especially difficult to treat in the current situation of the care facility"; the cumulative contribution rate of these factors was 48.8%.

Key words: Long-Term Care Facility, Long-Term Care Facility Staff, Demands and Problems, Conscious Factors